

呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為  
—北西海岸ネイティブ編—



菅 豊

動物考古学 第4号 1995.5

動物考古学研究会

# 呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為 —北西海岸ネイティブ編—

●  
菅 豊

## はじめに

本稿では、一見何の変哲もない魚叩棒に実は儀礼的な道具としての意味が、そして、生業活動の中で、一見プラクティカルに繰り返されているかのごとくとらえられる魚叩行為に、儀礼的な所作が読み取れることを示し、その背景にあるサケをめぐる民俗的な再生世界を概観することが目的である。素材としてアイヌ、北西海岸インディアン（以後、北西海岸ネイティブと表記する）、日本の事例を中心として考察するが、前号で既に、北海道において狩猟・採集・漁撈を中心に生計を営み、サケと密接に関わってきたアイヌの事例を取扱った。アイヌにおいて魚叩棒は、儀礼複合体の中の呪具としてイナウと同一視され、その装飾に特有の形態が見られた。またその魚叩棒をめぐってあやなされる儀礼や口承文芸から、サケの魚叩行為がサケの靈魂の送り返し儀礼であることが明らかになった。それはサケの生と死の論理の上に成立しており、アイヌの観念的世界観を如実に示している。

本号では、できるだけ多くの北西海岸ネイティブの魚叩棒、サケ儀礼、口承文芸などの事例を提供することを、第一の目標とする。そして、北西海岸ネイティブによって伝承されてきた、魚叩棒の形態・装飾・材質など物質面の特徴から、まず魚叩棒と魚叩行為の意味について検討し、次いでそこに込められている精神世界について、儀礼的な所作、口承文芸などの方面から、アイヌとどのような関わりを持つのか、あるいは独自の地域的な展開が見られるのかという問題について考察していく。

## 1| 北西海岸ネイティブの魚叩棒の実例

北西海岸ネイティブは、北アメリカの北西部、ちょうどアラスカからカリフォルニアの間に挟まれた細長い北太平洋沿岸地帯に居住する人々である。この地域の海岸線は、急峻な山々が海に落ち込む溺れ谷で、フィヨルド様の複雑な入り江が続いている。そして、山壁を縫うようにして、急流河川が入り江まで連なっている。この地域は、北緯50度～60度とかなり高緯度に位置するにも関わらず、暖流のおかげで気温の側面からは温帯的な気候区分に入る。また、年間を通して降水量が多く、湿潤な気候は豊かな常緑樹の森林を形成させている。

北西海岸ネイティブとは本稿では、大きくTlingit族、Haida族、Tsimshian族、Kwakiutl族、Bella Coola族、Nootka族、Coast Salish族の7ネイティブリを総称したものである。彼らは北方のエスキモー系<sup>2)</sup>の諸集団、東方内陸部のChilcotin族やCarrier族、Tahltan族などのアサパスカン系<sup>3)</sup>諸集団、南部のInterior Salish族、Kootenay族など台地に居住する集団と、長きにわたって相互に文化を交流させてきたが、その文化は他の諸集団と明確に画するに足る十分な独自性を持っている。その独自性は、木材や植物繊維を巧みに細工した美術工芸技術、高度に発達した階層社会、ポトラッチに代表される儀礼複合体などに現れており、早くより多くの人類学者の注目の的となっている。また、この地域の民族誌的な成果は、日本の縄文社会を理解するための比較材料としても用いられており、「縄文式階層社会」といった考え方までも生みだすこととなった(渡辺 1990)。

このような文化的に高度なコンプレックスを生じせしめた要因として、その経済生活を支えた豊富な自然資源が考えられている。北西海岸ネイティブは、原則として農耕を行わず、豊富な自然資源に依拠する漁撈・狩猟・採集を基本的なサブシステムとしている。それぞれのサブシステムへの比重のかけ方は、部族、あるいは地方集団の居住する環境によって変わっ

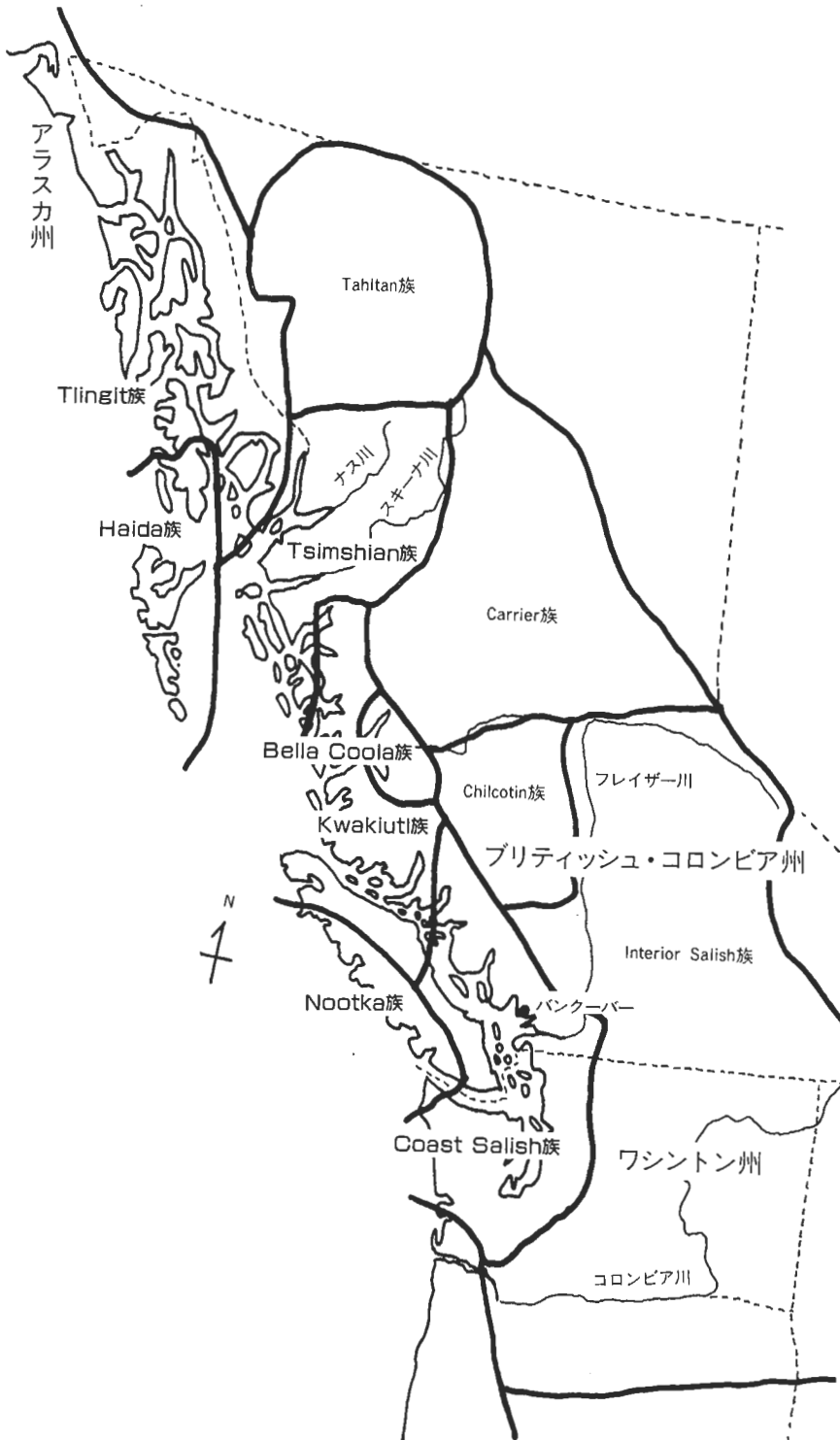
てくるが、おおむね漁撈・狩猟・採集という活動の複合的展開が、彼らの生活を支える原動力であったことは間違いない。このような非農耕社会が、高度な文化を醸成していることに、多くの人類学者が惹かれたのである。

ブルーベリーやハックルベリーなどのベリー類、根菜類、ザゼンソウやシロツメクサの仲間などの植物性食料はもとより、シカ、エルク、ヤギ、ムースなどの陸棲の動物、アザラシ、トド、クジラ、イルカなどの海獣類も多く利用されてきた。しかし、この北西海岸ネイティブにとって、もっとも量的に重要で、しかも安定した食糧としてサケ、ニシン、オヒョウ、タラなどの魚介類を忘れてはならない。特にサケは、遡上期に大量に捕獲され、保存加工されてほぼ一年を通して食されるステイプル・フード(主食)である。この魚種の存在が、この地域の文化の発展に大きく寄与してきたのである。それ故、サケを獲得するための多様な漁撈技術と、サケをめぐる多くの洗練された儀礼、禁忌、神話を北西海岸ネイティブは保持している。

北西海岸部で捕獲される主なサケ科の魚類は、マスのスケ(英名キング、チヌーク、及びスプリング、学名*Oncorhynchus tshawytscha*)、ギンザケ(英名コーホー、及びシルバー、学名*Oncorhynchus kisutch*)、ベニザケ(ソツカイ、学名*Oncorhynchus nerka*)、カラフトマス(英名ピンク、及びハンブバック、学名*Oncorhynchus gorbuscha*)、シロザケ(英名チャム、及びドッグ、学名*Oncorhynchus keta*)の5種である。これらをつまみ取るために流し針を使う釣魚をはじめとして、刺し網、すくい網などの網漁、カギ、ヤス、モリなどの刺突漁、エリ、ヤナなどの陥穽漁などが、環境条件に応じて展開されていた。

このような1次的な漁具によって捕らえられたサケ類は、いずれの場合も水中から引きずり出されるやいなや、その頭を殴られ殺される。この際に使用される2次的な漁具が、魚叩棒である。この漁具は、特にサケだけに用いられるのではなく、オヒョウなどの大型魚、アザラシ、ラッコなどの海獣類を撲殺する時など

図1 北西海岸ネイティブとその周辺諸族



にも流用されることが多い。

前号で筆者は、アイヌのサケの魚叩棒を分析し、それがサケの霊送りのための儀礼的な装置であることを述べたが、ここ北西海岸ネイティブにおいても、それは実用的な漁具としての意味だけではなく呪具的な意味を付与されている。以下、実在の明確なものとともに、民族誌や報告書に掲載されているものも事例として提示する。魚叩棒の名称、ネイティブ(部族)名は引用した文献、博物館の資料台帳などの表記によった。

#### 事例1「Wooden Club」 Tlingit族

デンバー美術博物館所蔵。全長・直径・材質は不詳。打頭部が太く、握りに近づくと細くなっており、握りは全体の5分の1程度で、つかみやすいように細く整形してある<sup>9)</sup>。握りの後端部にはグリップエンドが残されている。握り以外の部分に、トドを形象した装飾が彫り込んである。この地域の伝統的意匠に則って円筒状の表面に、平面的に描かれている。この2次元デザインはトーテム芸術に施される一般的な技法で、箱や家屋の前面、カヌー、食器、天幕など様々な器物に用いられる(Holm 1965:14-17)。

#### 事例2「Fish Club」「Club」 Tlingit族

ワシントン州立博物館(シアトル)所蔵。全長559ミリ、幅95ミリ、厚さ63ミリ。したがって断面は長径が短径に比べ1.5倍ほどの楕円状になっていると考えられる。事例1同様、打頭部が太く、握りに近づくと細くなっており、握りも整形してあって握りの後端部にグリップエンドが残されている。この棒はアザラシやラッコなどの海獣類や、サケなど大型魚をカヌーに引き上げる際、殺すのに用いられる。材質はイエロー・シダー<sup>10)</sup>製。また、表面には彩色は施されず、線刻によって平面的な表現がなされている点も事例1と同じである。ただし描かれているトーテム動物はクジラで、大きな目の後ろに呼吸する穴まで彫り込んである(Inverarity 1950:153, Stewart 1977:62)。

#### 事例3「Killer Whale Fish Club」 Tlingit族

国立自然史博物館(ワシントン,D.C)所蔵。全長・

直径・材質は不詳。事例1、2同様、打頭部が太く、握りに近づくと細くなっており、握りも整形してあって握りの後端部にグリップエンドが残されている。また線刻の装飾技法も類似している。ただし、握りの部分が上に反りあがっている。描かれているトーテム動物はシャチである。解説によると、この棒はサケやオヒョウ、アザラシ、ラッコを殺す時に用いられる。通常、堅い木で作られ、サケやアザラシを捕食するシャチやトドなどの動物や、精霊が彫り込まれるという(Fitzhugh and Crowell 1988:295)。

#### 事例4「Club」 Tlingit族

プリミティブ・アート博物館(ニューヨーク)所蔵。全長390ミリ。直径・材質は不詳。精緻な人像が立体的に彫刻されている。片足を抱えた構図になっており、おそらくもう片方の伸ばした足が握りになるものと思われる(Stewart 1977:62)。

#### 事例5「Fishing Club」 Haida族

所蔵者、全長・直径・材質は不詳。全体が反っており、3分の1程度握りに整形してあって、握りの後端部にグリップエンドが残されている。打頭部には、魚類かクジラ類と思われる像の線刻が施されている(Drew 1982:36)。

#### 事例6「Club」 Haida族

国立人類学博物館(オタワ)所蔵。全長400ミリ。直径・材質は不詳。全体の3分の2程度が細い握りになっており、打頭部は先端に集中している。その分打頭部は太くなっている。打頭部には人面が立体的に彫刻されている(Stewart 1977:62)。

#### 事例7「Club」 Haida族

アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵。全長350ミリ。直径・材質は不詳。若干反っており、3分の1程度が握りに整形してある。打頭部には、鳥類(ワシ?)と思われる像が立体的に彫刻されている(Stewart 1977:62)。

#### 事例8「Club」 Haida族

事例7と同じく、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵。全長370ミリ。直径・材質は不詳。3分の1

程度が握りに整形してある点も事例7と同じであるが、顔の抽象的な2次元デザインを線刻している(Stewart 1977: 62)。

#### 事例9「Halibut Fish Club」 Tsimshian族

北海道立北方民族博物館所蔵。全長400ミリ、直径50ミリ。材質は不詳。全体の5分の2程度が握りになっており、滑りどめのための加工がなされ、後端にはグリップエンドがある。打頭部にはTlingit族の事例と類似した2次元デザインで動物が彫り込んである。Halibut(オヒョウ)の漁獲時を中心に使用したもので<sup>6)</sup>、打頭部にはトドを象徴した線刻がある。1988年にバンクーバーで製作された未使用の資料。

#### 事例10「Sea Lion Fish Club」 Tsimshian族

北海道立北方民族博物館所蔵。全長400ミリ、直径50ミリ。材質は不詳。全体の5分の2程度が握りになっており、滑りどめのための加工がなされ、後端にはグリップエンドがある。打頭部にはTlingit族の事例と類似した2次元デザインで動物が彫り込んである。名称にSea lion Fish Clubとあり、Sea lion(トド)を象徴したもの。1988年にバンクーバーで製作された未使用の資料。製作者、製作地、大きさ、形態などほとんどの面で事例9と同じである。

#### 事例11「Club」 Tsimshian族

北海道立北方民族博物館所蔵。全長410ミリ、直径45ミリ。材質は不詳。全体の3分の1が握りに整形されており、グリップエンドも残されている。打頭部にはTlingit族の事例と類似した2次元デザインで動物が彫り込んである。彫り込んである動物の詳細は判らないが、口の形からいって鳥類(ワシ?)であろうか。この棒の特徴的なのは、彫刻とともに彩色が施されている点で、同様の技法は他にはほとんど例を見ない。なお、この魚叩棒はGitskanというTsimshian族の地方集団が使用していた。

#### 事例12「Seal Club」 Kwakiut族

ネイティブ伝統文化センター(ダンカン)所蔵。全長・直径・材質は不詳。名称の通り全体にアザラシを象徴する彫刻を施している。この棒の特徴は、握り部

分を明確に整形していない点で、他の事例と大きく異なる。未使用のもので、工芸作品として製作されたために、伝統的な魚叩棒の意匠が変化した可能性もある。

#### 事例13「Fish Club」 Kwakiut族

ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館(バンクーバー)所蔵。全長406ミリ。直径・材質は不詳。全体の4分の1ほどが打頭部で、丸く球状に膨らんでいる。ハンマー型の形状をなす。ここに人面が線刻されている。握りの中間には、2カ所リング状に削り込みが入っている。なお、この魚叩棒を使用していた部族はKwakiut族のBella Bella(Heiltsukという方言集団)という地方集団で、Bella Coola族の文化的な影響を強く受けている<sup>7)</sup>(Hawthorn 1979: 85)。

#### 事例14「殺魚棒」 Kwakiut族

国立民族学博物館所蔵。全長・直径・材質は不詳。打頭部が太く、握りに近づくにしたがって細くなっている。明確な握り部分の整形はなく、いわゆるバット型ととらえられるが、打頭部の直径が握りに比べて極端に太い点からいってハンマー型に近いタイプと考えた方がよいであろう。握りの後端部にはグリップエンドが残されている。打頭部には数カ所切れ込みが入れている。これは装飾的な工夫というよりは、頭部を強く叩くための実用的、機能的な工夫のようである。これもBella Bellaという地方集団で使用されていた。

#### 事例15「殺魚棒」 Kwakiut族

国立民族学博物館所蔵。全長470ミリ。直径・材質は不詳。全体の3分の1ほど握りが整形されており、グリップエンドも残されている。打頭部には、全面に2次元デザインでネズミザメが彫刻してある。リバーズ・インレット地方に居住するOwikenoという地方集団で使用された。明治43年に相川之賀氏によって、東京大学理学部人類学教室へ寄贈、その後、国立民族学博物館に移管。

#### 事例16「Club」 Kwakiut族

ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館(バンクーバー)所蔵。全長450ミリ。直径・材質は不詳。全体の3分の1ほどの握りが整形されており、グ

リップエンドも残されている。打頭部には、精緻な人像が立体的に彫刻されている (Stewart 1977: 62)。

#### 事例17「Club」 Kwakiut族

国立人類学博物館 (オタワ) 所蔵。全長345ミリ。直径は不詳。材質はイチイである。握りは整形され、打頭部には、丸い石をつかんだ拳が写實的、立体的に彫刻されてある。バランス的にはハンマー型になる<sup>8)</sup> (Stewart 1977: 63)。

#### 事例18「Club」 Kwakiut族

アメリカ自然史博物館 (ニューヨーク) 所蔵。全長350ミリ。直径・材質は不詳。打頭部が<sup>9)</sup>極端に太く、球状に整形されている。打頭部と握りは、球の中心からずれており、横から見るとL字型になる。バランスから考えて、握りと球の接続点が打頭部の中心になると考えられる (Stewart 1977: 63)。

#### 事例19「Club」 Kwakiut族

アメリカ自然史博物館 (ニューヨーク) 所蔵。全長350ミリ。直径・材質は不詳。打頭部が<sup>9)</sup>極端に太く、球状に整形されている点は事例18と同じであるが、握りが球の中心で接続している点が異なる。事例18とともに、打頭部が全体の中で特に大きく作られる典型的なハンマー型の魚叩棒である (Stewart 1977: 63)。

#### 事例20「Fish Killing Club」 Nootka族

国立民族学博物館所蔵。全長394ミリ。打頭部の直径74ミリ。重さ272グラム。打頭部が<sup>9)</sup>極端に太く、球状に整形されたハンマー型の魚叩棒である点や、握りが球の中心で接続している点などは、事例19に酷似している。ただし、球状の打頭部の直径が握りの長さに対して、事例19ほど大きくない。

#### 事例21「Club」 Nootka族

ワシントン州立博物館 (シアトル) 所蔵。全長360ミリ。直径・材質は不詳。全体の4分の1ほどが整形されたグリップエンドをとまなう握りで、そこから連続するような形で太さがそれほど変わらず柄部を構成する。その先端に全体の4分の1ほどの打頭部がついている。打頭部は丸く球状に膨らんでおり、ハンマー型の魚叩棒である。事例13と外形面で酷似しているが、事

例13のような人面の線刻などの装飾は見られない。なお、この棒はMakahという地方集団が使用していた。(Stewart 1977: 63)。

#### 事例22「Sturgeon Club」 Coast Salish族

ブリティッシュ・コロンビア州立博物館 (ビクトリア) 所蔵。全長415ミリ。直径・材質は不詳。打頭部が太く、握りに近づくにしたがって細くなっている。握りはつかみやすいように細く整形されて、握りの後端部にはグリップエンドが残されている。握りと打頭部が連続しているためバット型ととらえられるが、打頭部の直径が握りに比べて極端に太い点からいってハンマー型に近いと考えた方がよいであろう。この点は事例14に類似している。Sturgeon Clubの名称が<sup>9)</sup>付記されていることからして、Sturgeon (チョウザメ) の漁獲の時に、主として用いたのかもしれない (Stewart 1977: 63)。

#### 事例23「Club」 Coast Salish族

所蔵者、直径・材質は不詳。全長400ミリ。打頭部が極端に太く球状に整形され、握りから連続する柄部が、球の中心で接続している。打頭部が全体の中で特に大きく作られるハンマー型の魚叩棒である。握りと打頭部の太さに大きな違いがあるなど、事例19と酷似している。柄部は整形されグリップエンドも残されている (Stewart 1977: 63)。

次に上げる事例は北西海岸ネイティブではあるが、どのネイティブに属するか判別できない魚叩棒の実例である。

#### 事例24「Fish Club」 ネイティブ (部族) 名不詳

北海道立北方民族博物館所蔵。全長450ミリ。直径50ミリ。材質は不詳。全体の4分の1ほどが整形されたグリップエンドをとまなう握りで、そこから連続するような形で太さがそれほど変わらず柄部を構成している。その先端に全体の4分の1ほどの打頭部がついている。打頭部は丸く球状に膨らんでおり、ハンマー型の魚叩棒である。事例13、21と外形面で酷似しており、特に打頭部に線刻などの装飾が見られる点は事例13と同じである。ただし彫り込まれているのは、人面

ではなく、アザラシとクジラなどを合成したイメージ図像である。打頭部には、さらに金属製の鋏や象眼が施されている。19世紀初頭の製作と推測されている。

### 事例25「Salmon Clubs」 Nootka族？

アンダーヒルによって報告された魚叩棒。彼は3点の魚叩棒を紹介しているが、いずれも所蔵者、全長・直径・材質が不詳。打頭部が太く、握りに近づくにしたがって細くなっている。握りはつかみやすいように細く整形されて、握りの後端部にはグリップエンドが残されている、いわゆるバット型である。他の魚叩棒と異なり、装飾がグリップエンドに施されている。この事例の内、1点には打頭部にも線刻らしきものが見られる。これらの魚叩棒のはっきりとした使用ネイティブは判らないが、アンダーヒルは、Nootka族の地方集団Makahの漁撈生活について記述する中でこれを掲載しているので、Makahの魚叩棒かもしれない (Underhill 1945: 26)。

## 2 | 北西海岸ネイティブの魚叩棒の特徴

以上、北西海岸ネイティブの保持していた魚叩棒を提示した。ここで取り上げた事例は、北からTlingit族4例、Haida族4例、Tsimshian族3例、Kwakiutl族8例、Bella Coola族0例、Nootka族2例、Coast Salish族2例、ネイティブ(部族)名不明2例の25例になる。引き続いてその形態について細かく見てみよう。

### (1)北西海岸ネイティブの魚叩棒の大きさ

提示した25例の内、19例について全長が判っている。これによると北西海岸ネイティブの魚叩棒の全長は、最小345ミリ、最大559ミリと数値に幅があるが、平均は約403ミリで、多くの棒がこの平均値とそれほどかけ離れた値を示さず、地域別、ネイティブ別の大きさの偏差がそれほどない。この値は前稿で紹介したアイヌの魚叩棒より若干大きい程度である(アイヌは380ミリ)。直径については、ほとんどの事例で明示しておらず、またあったとしても計測箇所を明らかにしていないので最大径、最小径の数値が判らない。北西

海岸ネイティブの魚叩棒の場合、形態的に起伏に富んでいるために、1カ所のみの数値では比較上あまり意味を持たない。細かい数値で比較できないのが残念だが、写真や図版で見る限り全体の径は北西海岸ネイティブの魚叩棒の方がアイヌのものより太いようである。

### (2)北西海岸ネイティブの魚叩棒の形態

北西海岸ネイティブといっても、本稿で対象としただけで7ネイティブにのぼり、それぞれが文化的に微妙に異なった地方集団から形成されていることから考えて、ここで提示した事例数では北西海岸ネイティブの魚叩棒に共通する、あるいは異なった形態の特徴を明確に提示することは困難である。また製作年代も不明であるため、それぞれの形式的な発展の道筋をたどることは容易ではない。そのような分析条件のもとで、あくまで限定的な見解を示すとするならば、北西海岸ネイティブの内、南部に居住する人々ほど、魚叩棒は、打頭部の直径が握りに比べて大きく、打頭部の長さが全長の中で占める割合が少ないハンマー型が多くなるようである。例えば、北西海岸の南部に位置するNootka族、Coast Salish族に関する事例20、21、23がハンマー型、事例22がハンマー型に近いバット型と、そのほとんどがハンマー型の特徴を有している。またこの両ネイティブの北側で境し、北西海岸のほぼ中央に位置するKwakiutl族では、8例の内、事例13、14、17、18、19と半分ほどがハンマー型の特徴を持っている。一方、さらに北に居住するTlingit族、Haida族、Tsimshian族の間にはほとんどハンマー型を見つけないことができない(11例の内、事例6のみ)。

南部の諸ネイティブはハンマー型という打頭力の高い形態の魚叩棒を使用するのに対し、北部の諸部族はそのような打頭力を特に引き出すような形態の魚叩棒はほとんど持っていないのである。

前稿で紹介したアイヌの魚叩棒には、打頭部と握りの直径にあまり差がない直棒型<sup>9)</sup>が多かったが、北西海岸ネイティブの魚叩棒にはこの形式は見られない(現代の非ネイティブの使用するものには見られる)。



せいぜいバット型の事例25の3点だけが、近世アイヌの書物に登場する魚叩棒に類似するのみである（筆者前稿参照、谷 1799）。

### (3)北西海岸ネイティブの魚叩棒の装飾

北西海岸ネイティブの魚叩棒は、北の人々のものほど動物などを彫り込むという装飾的特徴を有したタイプが多く、南に行くほどその装飾が希薄になっていく傾向がある。

北西海岸の北の方に位置するTlingit族、Haida族、Tsimshian族に関する事例1～11は、彫刻技法には違いがあるもののすべて、動物や人像を打頭部に象っている。また北西海岸ほぼ中央のKwakiutl族では、事例12、13、15、16、17にアザラシ、人面、ネズミザメなどの彫刻が見られるが、事例14、18、19のように特定の装飾的図像をとまなわないものも見受けられる。事例13を使用したBella Bellaという地方集団、また事例15を使っていたOwikenoという地方集団はともにNorthern Kwakiutlで、Kwakiutl族の領域の北部に居住しているため、これらの図像的な技法が、北方ネイティブから影響を受けた可能性もある。一方、さらに南部に居住するNootka族、Coast Salish族では、そのような装飾的な図像が魚叩棒に施されず、ほぼ球状の打頭部を持つ魚叩棒となる（事例20、21、22、23）。

ヒラリー・スチュアートは、Tlingit族とHaida族の魚叩棒を比較して、南のものほど精巧さに欠け、装飾が除かれる傾向にあることを指摘しており（Stewart 1977: 62）、本稿の限られた事例の中でもその傾向性は首肯できる。先に南部の部族ほど機能的な工夫に関心を持っていたことは述べたが、対して北部の部族は装飾的な工夫に特に注意をはらっていたといえる。

さて、魚叩棒に描かれた装飾的な図像について見てみよう。まず、図柄であるか描かれているものはトド（事例1、9、10）やクジラ（事例2、5、24）、シャチ（事例3）、アザラシ（事例12、24）、ネズミザメ（事例15）、鳥類（事例7、11）など野生動物が最も多い。それ以外の図像は、人像（事例4、16）、人面像（6、

8、13）、石を持った拳（事例17）などで、装飾的図像を持つ魚叩棒の約3分の2を動物図像のものが占めている。

このような動物図像は、魚叩棒にのみ施されるような意匠ではなく、漁撈を取り巻く他の道具にも施されるものである。例えば、多くのオヒョウ用の釣針にはクマやワタリガラス、アザラシ、オオカミなどの動物図像が彫刻されている。また、浮きにもクジラ、トド、ラッコ、ハクチョウなどが彫られている。北西海岸ネイティブは、大きな魚を獲得する時に助けてくれる霊的な補助者、力の観念を持っており、このような彫刻が、その力と彼らが通じ合うために施されたと考えられている（Stewart 1977: 46）。

動物図像以外の人像、あるいは人面像も、この霊的な存在と深い関係がある。北西海岸ネイティブの間では、すべての動物たちは本来人間の形態を有すると信じられており、多くの霊的能力を持つ動物たちが、普段から人間と変わらない姿で描き出されている（Goddard 1974: 156）。すなわち、ここで人像をもって形象されているのは、神話的な動物であり、やはり漁撈を保護する霊的な力を表象していると考えられる。

次に、彫刻技法であるが、魚叩棒には線刻を中心とした平面的な2次元デザインと、写実的、立体的な3次元デザインの両者が見られる。数量的には2次元デザインが多い。この2次元デザインは、トーテム芸術に施される一般的な技法で、箱や家屋の前面、カヌー、食器、天幕など様々な器物に用いられることは先にも述べたとおりである。そして、これは、神話や禁忌など観念的な思考を呼び起こすために、一定の様式化がなされている。通常、立体的な動物を分割し、解剖図的に平面化して、これを組み合わせて表現する。北西海岸ネイティブの彫刻技法は、もともとこのような様式化された抽象度の高い2次元デザインが多く、写実的な技法は広まっていなかった（Goddard 1974: 156）。魚叩棒に施されている細工は、魚叩棒だけに適用されるような独自のものではなく、広く一般の彫刻技法が応用されていたのである。

アイヌの魚叩棒には、儀礼的な道具であるイナウト同様の削りかけの技法が適用され、イナウトと同一視されている。そして、魚叩棒はその民族の全体的な儀礼様式に規定されて存在していたが、北西海岸ネイティブの魚叩棒も同じく、その民族の育む儀礼様式に則って成立しているのである。したがって、魚叩棒を理解するには、その背景に広がる北西海岸ネイティブたちの観念的世界を探る必要がある。

### 3| 北西海岸ネイティブの サケをめぐる観念的世界

北アメリカ大陸では、多くの人々が魚や漁撈に関する“主”の観念を有している。“主”は、人間を含めて生きているものすべてを支配する超自然的な力が存在するという宗教観の反映であり、所有者、主人、支配者、守護者、親分などといったかたちで顕われてくる。このような観念はかなり卓越性を持っており、特に漁撈や海獣の特猟活動が、地域経済において重要な地位を占めているところではとくに頻繁に見受けられる(Hultkrantz 1984: 865)。

例えば、北西海岸ネイティブの北方に位置するエスキモー系の北西海岸部集団は、魚類の他にアザラシなどの海獣をサブシステムの重要品目としているが、彼らは海の深みに棲むアザラシの女王という超自然的な存在を信じている。これはSednaの名で知られ複雑な性格を持っている<sup>10)</sup>。Sednaは時には擬人化され、またある時はアザラシの姿をもって出現し、アザラシの支配者として考えられている。この女王はアザラシの取り扱いを規定し、もし人間がそれから逸脱したときには超自然的な力をもって対応するとされる(Boas 1964: 175)。また、南部の台地に居住する集団、特にInterior Salish族などでは、水中の霊的な存在が漁撈の成否を左右すると考えられている(Teit 1900: 344, 1930: 182, 383)。北西海岸ネイティブも同様で、Tlingit族はエスキモー系集団の影響を受けたためか、海獣や魚類を支配する最高の女神を認めている(Swanton 1908: 453)。また、サケ類は、それらを代

表する首長を持っているとされた(Swanton 1909: 196)。Haida族やTsimshian族ではシャチの王が信じられ(Hultkrantz 1957: 105)、Kwakiutl族ではニンシヤサケの主、海獣の主が海神として伝承されている(Boas 1935: 129-130)。そして、そこではシャチが漁師に魚をもたらしものとして認識されている(Boas 1966: 165)。このような魚類、海獣類の“主”に対する観念は、北西海岸ネイティブだけでも多様であり、また1つのネイティブ(部族)に限ってみても地方ごとの変化に富んでいて、一般化するの難しい。

ハルトクランツは、北米諸族の魚類、及び漁撈を統御する超自然的な存在を現象学的に分析したが、彼によると支配する“主”は、1、群の最初に到来した個体を“主”とするタイプ(初サケなどに対する信仰、後ほど詳述する)、2、特定の動物の種類を代表して“主”とするタイプ、3、一般的な抽象的存在を想定して“主”とするタイプ、4、全体的な宗教生活の中の最高神が“主”をかねるタイプの4類型に分類されるという。この分類からいうと、北西海岸ネイティブには1、2、3の類型が存在し、バラエティに富んでいるといえる。その出現形態は、巨大な魚であったり、シャチ、アザラシ、カニであったりする。この超自然的存在の姿が、魚叩棒に投影されることがたびたびあった。

先に魚叩棒に彫刻された装飾が、魚を獲得する時に助けてくれる霊的な補助者、力と彼らが通じ合うために施されたというヒラリー・スチュアートの見解を述べたが、漁撈を補助する力の源泉には、このような魚類を支配する“主”の観念が存在し、それを魚叩棒など漁具に投影することは、漁撈を成功へ導くための儀礼的な意味—彼らの論理では儀礼的な意味と経済的な意味が不可分であるが—が魚叩行為に込められていたことの証しである。その点からいうと魚叩棒には、単に漁撈の最終段階である撲殺に使用される漁具としての重要性だけではなく、観念的世界の投影された儀礼的な道具としての重要性が指摘できる<sup>11)</sup>。

筆者は前稿で、アイヌの魚叩棒の呪具の意味、魚叩行為の呪術的な意味について解説した。アイヌでは、サ

ケの遡上を支配する魚の神やサケの神が想定され、それに感謝するためにイナウである魚叩棒が神への贈り物として使用されていた。そして、その贈り物は、殺され肉体と分離されたサケの靈魂が、神のもとへともたらすと考えられている。筆者は最終的にその解釈法が、サケの生と死の循環論理を背景として成立することを指摘した(菅 1994: 31-32)。

北西海岸ネイティブでは、魚叩棒を神への贈与物として見なすかわりに、それ自体に守護神、支配神たる“主”を刻み込んでいる。これはそれぞれの民族の持つ様式的な儀礼複合体に規定されたものであり、当然、民族文化のありようの違いによって表出する姿は変化すると考えてよい。それではアイヌで筆者が想定した、サケの循環論理の方は北西海岸ネイティブではどのように考えられているのであろうか。同様の図式が描けるのであろうか。

結論から先に述べるが、北西海岸ネイティブにも同様の、いやさらに明確なサケをめぐる生と死の循環論理が存在する。

#### 4 | 北西海岸ネイティブの サケをめぐる生と死の循環論理

サケ、及びサケ漁には、その経済としての重要性からか、多くの禁忌、口承文芸、取り扱い上の規範、儀礼といったものが付随している。例えば、成女儀礼中の女性はサケを食べてはならないとか、死人が出た家の遺族は、遡上初期のサケを食べてはならないとされた(Hill-Tout 0904: 108)。また、人間の双子がサケを到来させる力を持っていると信じられたり、それ自体がもとはサケであったと信じられていた(Stewart 1977: 172)。このようなサケをめぐる禁忌や信仰は、先に述べたサケを支配する“主”の観念が、北西海岸ネイティブだけでも多様で、また1つのネイティブ(部族)内でも地方変移に富んでいたのと同様に、全北西海岸において一般化するのには困難である。しかし、多くの北西海岸ネイティブには、サケに限らずすべての動物たちが、本来は人間と同じものであり、人間と同

じ存在形態を持つという考え方があった。これは先述した魚叩棒を含め、様々な器具に動物を人間化して表現していることから明らかである。

Coast Salish族では、サケは5つの部族から構成されると考えられている。これは北西海岸部で捕獲される主たるサケ科の魚類マスノスケ、ギンザケ、ベニザケ、カラフトマス、シロザケの5種に対応する。サケは、海の中では人の姿をとり、それぞれの村で大きく長い家に住んでいる。そしてそこで彼らは、自分たちが訪れる人間たちの世界とよく似た生活の場と習慣、行動様式を持っていると考えられている(Ashwell 1978: 28)。1年間のある特定の時期に、このサケの人々は魚に姿を変じて海を旅した後、川を泳ぎ遡る。ある漁師は、最初に人間に捕らえられる初サケは魚たちの“首長”であり、これに導かれてくるものだと信じている。また、初サケは、魚たちが遡上するにあたって先行して送り込んだ“斥候”だともいわれる。(Stewart 1977: 172)。

Tsimshian族では、世界は平坦で大海原に囲まれており、サケの人々が海の中のいくつもの国を越えて自分たちの世界へとやってくると考えられている。彼らは、ポプラの葉が川面に落ちると、それがサケの人々にとっての“サケ”に変じるとし、春になるとサケの人々は偵察するために仲間を送って、その葉が落ちていないか、つまり“サケ”が川にいないか確かめてもらう。“首長”が“サケ”を発見すると、サケの人々は人間の世界への旅を始めるとされる。Tsimshian族のシャーマンは、このサケの人々がどのような村で暮らしており、いつ自分たちの村へ出現するかを知ることができるといわれる(Boas 1916: 194-205)。また、Coast Salish族では上りはじめのシロザケは、超自然的な力を持つが故に危険な存在だといわれる(Suttles 1955:22)。

このように、“首長”“斥候”などその遡上をリードする重要な役割と、強力な靈力を最初のサケは持つために、もし、それへの取り扱いが悪い時は、他のサケは遡上しないとされる。それ故、その扱いは様々な禁忌、規則に則って丁重に行われる<sup>12)</sup>。この初サケを丁重

にもてなすために行われる儀式が初サケ儀礼 (First Salmon Ceremony) である。この儀礼は、本稿で取り扱う北西海岸ネイティブ、及びその周辺のサケを重要な産物とする諸ネイティブによって行われている<sup>13)</sup>。Kwakiutl族を例に見てみよう。

シーズンが到来して最初のシロザケを捕まえたとき、Kwakiutl族の漁師の妻はわざわざ岸までこのサケを迎えにいき、サケに向かって次のような祈りを捧げる。

“おお、不思議なるものよ、おお、泳ぎきたるものよ。あなたが我々のもとへ喜んできてくれたことに感謝します。悪い障りのあるものはここへもたらさないてください。何故ならあなたは我々の糧となるのですから。理由なき不慮の死を遂げぬよう、我々を慈悲深く守りください。泳ぎきたるものよ。”

彼女はこの祈りに対して“はい”と自分で答える。そして岸辺の堤防の上で突き捕ったサケを解体し、内臓などの残滓を籠にかき集め、これを河口に流す。これを水中に投げると、様々な種類のサケが蘇るといわれている。

また、最初のギンザケが捕れると、漁師の妻は同じように岸までこのサケを迎えにいく。彼女はそれを家に持っていき前に、4匹のギンザケを岸に並べて同様の祈りを捧げ、フィッシュナイフで頭と尾を背骨につけたまま切り取る。次に持参した火箸をよく焼いて、これを眼に突き刺しサケを縛り付ける。そして、残滓を海に投げ入れ、この火箸に刺したサケを家に持ち帰り、火のそばに置いて眼を黒く焼く。

焼いている間に、自分の儀礼集団 (numaym と呼ばれる) 招待し、この焼きあがったサケの黒焼きを共食する。これはできるだけ早く食べなければならない。もしこれが一晩中家の中に置かれていたならば、ギンザケがもうやって来ないといわれている。客は、火のそばに腰掛ける。その前に妻は新調したフードマットを敷いて、眼のついたサケの火箸を置く。招待客の中で最も高階層のものが、祈りを捧げる。全員が食後、水を飲むが、それ以後手を洗わないように注意する。骨や皮の破片は集めて、フードマットにくるんで海に投

げ込まれる (Boas 1921: 609-612)。

以上のように、Kwakiutl族<sup>14)</sup>の初サケ儀礼には、サケの取り扱いに関する微にいった規定が存在し、最終的には残った骨や皮、内臓などを海や川に流すという行為が行われる。水中に投げる行為は、北西海岸ネイティブではKwakiutl族、Nootka族、Bella Coola族、Coast Salish族 (Cowichan という地方集団)、その周辺のネイティブではInterior Salish族 (Lillooet という地方集団) などで行われていた (Gunther 1928: 151)。北西海岸ネイティブの内、南部に居住する集団でこの行為が行われた傾向性を読みとれる。Tsimshian族などでは骨を流しはしないものの、やはりすべての残りの骨をかき集め、散逸しないように火にくべることが行われていた。

これらの行為の背景にある思考は、儀礼以外の口承文芸などに反映され、儀礼以上に大きな広がりをもって北西海岸ネイティブの間に分布している。

水中にサケの体の一部を流したり、火中に投げる行為は、初サケ儀礼を行う人々に語られるように、そうすることによってサケが再び生き返るという信仰に基づいている。このサケの再生についての考え方は、以下紹介するTlingit族やTsimshian族、Coast Salish族 (Squamish という地方集団) などの口承文芸の中でより明確に語られている。

#### ①「Moldy-end (惨めな死?)」 Tlingit族

「ある時、1人の少年がサケに対して無礼な振る舞いをしたために、川で溺れてしまった。危うく溺れ死んでしまうところで、見知らぬ人々に助けられた。しかし、それは人間の姿をとっているが、実はサケであった。サケの人々は、少年を自分たちのサケの村へと連れていった。少年はサケの村で暮らすことになるが、食べ物はどうやって手に入れたらよいか判らない。ひもじい思いをして困っているところ、1人の女性が彼のそばに来てこう呟いた。“あなたはサケの人々に対して(無礼なことを)いった時のことを覚えていますか。そのためにあなたは捕らえられたのです。”彼女は続けていった。“あなたは向こうに小川があるのを知っていま

すか。ひもじい時はそこからサケを捕って、それを焼いて食べなさい。ただしそれを食べた後、残ったかすは必ず川に流しなさい。また、焼くときに使った棒も、残りかすを川できれいに洗い流しなさい。”この言葉を聞いた少年はとてもおなかが空いていたので、早速サケを捕らえて食べた。そして、彼女のいったとおりに残りかすは水の中に投げた。また、焼くときに使った棒についている残りかすも、川できれいに洗い流した。

しかし、その晩、サケの人々の首長の眼がひどく痛みだした。そのため彼はうなされ、眠ることができない。そこで、少年にサケを捕って食べるようにいった女性は、少年に向かってこういった。“あなたはどこで料理したか覚えていますか。多分、そこに眼を置き忘れてははずです。”少年はその眼を見つけ、彼女の指示通り(川に流す)にしたら、首長の眼の痛みはなおった。

しばらくたって、サケが人間の村を訪れるという。サケたちは分かれて、人間たちの村のそばのいろんな川を遡るようになっていられるらしい。少年はサケのカヌーに乗せてもらい、自分の村のそばを通りかかった際に、家へ帰ろうとサケに姿を変じ水中に身を投じた。ちょうどその時、少年の母親が岸辺にいるのを少年は見つけ、近づいていった。これを見つけた母親は、少年の父親を呼びにいったように述べた。“立派なサケがこのあたりを泳いでいる。”母親にはサケに変じた姿は息子とは判らなかつたのである。父親は早速、サケ(少年)をかき捕った。少年は意識を失った。父親は妻に向かって、“新鮮なうちにさばいてしまいなさい。”と命じた。

母親は、この言葉に従いさばき始めたが、頭を切り落とそうとしても堅くて、彼女のナイフではどうにも切れない。よくよく見ると首のところに銅の首飾りが巻いてある。母親は、すぐにこれが行方不明になっている息子の首飾りであることに気づき、このサケが自分の息子であることが判った。それでサケをマットの上に横たえ、羽を乗せて家の上においた。そしてシャー

マンに祈りを捧げてもらった。祈りのかいてもあって、夜も深まった頃、家の上で大きな衝撃がおけるとともに、息子は人間へとその姿を戻すことができた。](Swanton 1919: 311-320、引用者要約、傍線引用者)

## ②「サケ(マスノスケ)に連れさらわれた王子」

### Tsimshian族

「ある時、飢饉で多くの人々が飢えている村があった。その首長夫婦は長い航海に出ていて不在であった。残された息子(王子)が、どうしたものか思案していた。王子は窮余の策として、2年間母親が干しサケを蓄えてある箱を開け、飢えている奴隷たちに与えた。ところが両親が航海から帰ってきて、このことを知り王子を強く叱責した。母のきつい言葉に傷ついた王子は、その夜家を離れた。

いくあてもなく川の岸辺で休んでいると、見知らぬ4人の人々(人間の姿をしたサケ)がカヌーで現れた。彼らは王子を自分たちの村へと招待した。王子はその誘いにおうじて彼らのカヌーに乗り込んだ。すると彼らは、航海の間、船の中で眠っているように王子に命じた。王子はこれに従って眠り続け、しばらくして眠りから覚めて外を見ると、そこには大きな村があった。これはマスノスケの村であった。すべての家にマスノスケの彫刻が施してあり、これらの家並みの中程にひととき大きな家があって、その村の首長が住んでいた。カヌーはその首長の家の前に上陸した。マスノスケの人々は王子に向かって“我々とともに偉大なる首長の家へいこう。首長はあなたを招待している”といった。それで彼らは首長の家に入っていったが、大きな家の奥では首長が横たわっていた。首長は、2年もの間、麻痺する恐ろしい病気にかかっていた。病いに伏した首長は付き添いのものに、火のそばにマットを敷くことを命じ、王子を座らせた。

すると隣りに老婆がやってきて、彼にふれながら次のように尋ねた。“親愛なる王子。あなたは誰がここに導いたか知っていますか”“いいえ”王子は答えた。“2年以上も病いに伏した首長のために、サケが連れてきたのです。何故ならあなたの母上が、2年間も小さな

箱の中に首長を閉じこめ続けていたからです。あなたが、以前箱の中から出してくれたおかげで少しもち直したところです。”彼女は続けた。“とてもおなかが空いたときには、魚叩棒でもって裏の砂丘で遊んでいる子ども達を殴り殺し、焼いて食べて下さい。ただし、すべての小骨まで集めて火の中に投じて下さい。”そういって彼女は立ち去った。

王子はこの村にしばらく滞在したが、どうにもおなかが空いてたまらない。それで老婆の教えを思い出し、村の裏手にいって見た。その砂丘では多くの子ども達が遊んでいた。王子はそれらの中から数人を丘の麓に投げ落とし、魚叩棒を手にとりてこれを殴った。見目麗しい少年を捕まえ、魚叩棒で殴ると、子どもはすぐに小さなマスノスケへと姿を変えた。王子はとても驚いたが、火をたいてそのマスノスケを丸焼きにした。焼け終えて早速それを食べた。そして、食後、すべての骨をかき集めて老婆のいうとおりに火にくべた。

それから王子は首長の家へ帰った。彼は家の脇に腰掛けようとしたが、その時ある少年の苦しうなうめき声が聞こえる。“おお、私の眼が猛烈に痛む、眼が痛い。”老婆が現れて、王子に向かって“あなたがサケを焼いたところへいって、穴を探してみなさい。”といった。これに従いすぐにいって見たところ、小さな穴の中にサケの眼玉を見つけた。それを火にくべて、戻ってみると眼を痛めていた少年の傷はなおっていた。老婆は再び王子に助言した。“新しいサケを食べたらすぐに水を飲んで下さい。”そうすることによってサケがすぐに生き返るといふ。

ある日、また、王子はおなかが空いてどうにもたまらない。それで村の裏手にいって見た。その砂丘では多くの子ども達が遊んでいた。王子はそれらの中からよく肥えたものを選び、魚叩棒を手にとりてこれを殴った。魚叩棒で殴ると、子どもはすぐに見目麗しい小さなマスノスケへと姿を変えた。王子は前と同じ場所、そのマスノスケを丸焼きにし食べた。そして食べ終えると骨を集め火に投じ、小川に行つて水を飲んだ。それでたいそう満足して家へと帰った。

しばらくたって、ある少年が家へ叫んでやって来た。“ああ、悲しいかな。私の肋骨が猛烈に痛む。ああ、悲しいかな。私の肋骨が猛烈に痛む。”彼は苦しうに叫んだ。それを聞いた王子は、再び焼いた場所へと戻ってあたりを探してみた。すると木片の下に小さな肋骨があった。すぐにこれを火に投じ、家に帰ってみると、先ほどの痛んでいた少年は回復していた。

ある時、病がなおった首長が、ご馳走を用意して王子をもてなした。王子が食事を食べ終えた頃、やおら次のように語った。“私はあなたがこの村へ来てくれて喜んでいる。我々があなたの村へあなたを送り届ける日まで、私と一緒にこの家で暮らしたらいい。我々のよき民とともに。あなたの面倒は私がみよう。私は非常に喜んでいる。何故ならば、あなたが私を母親の小さな箱の中から出してくれたからであり、私の足、手を解放してくれたからである。それ故、私は私の家へ招待したのである。”

こんなことがあってしばらくして、マスノスケの首長は奴隷に命じて2つの川を偵察させた。偵察は、川に多くのポプラの葉が落ちているのを見つけ、早速報告した。これを聞いた首長は、まもなく川を上る時期が近いことを告げ、その準備にとりかからせた。それから部族のみんなを家に呼び、偵察の話をした。みんなは数日中に出発することに賛成した。奴隷が新しいポプラの緑の葉（サケの人々にとってのサケ）を持って来ると、一同大いに喜んだ。

いよいよ予定の日が来た。彼らは王子とともに深い海の中にある家からの移動の準備を整え、ゆっくりと進んでいった。するとすぐにギンザケの街へとたどり着いた。そこでマスノスケの首長は偵察がもたらしたすばらしい新しいサケについて語り、そのために移動している旨をギンザケに伝えた。これを聞いたギンザケの首長は“あなた達が移動してしばらくの後、私たちも動き始める”と語った。

しばらくしてマスノスケ達は、ギンザケの町を出立した。首長は口の中から小さくなめらかな丸い水晶を取り出し、王子に渡していった。“これを飲み込みなさ

い。それはすべての危険、死、困難からあなたを守ってくれるだろう。”王子はこれに従って、その水晶を飲み込んだ。

彼らは航海を続けたが、途中、多くのカヌーに出会った。彼らはその乗組員達に“2つの川の様子はどうかい。サケはいるかい”と尋ねた。乗組員達は“はい”と答えた。王子はマスノスケの仲間の1人に“彼らは一体誰だい”と尋ねると、“これらはスチール・ヘッド（ニジマスの降海型）の船です。彼らは我々がいこうとしている2つの川から帰ってきたところです。彼らは春先に川へと移動し、今は家へと帰っていく時なのです”と答えた。

しばらく進むと別の大きな街にたどり着いた。そこはカラフトマスの村であった。マスノスケの首長が、偵察によってスキーナ川とナス川からもたらされた新しいサケについて語ると、カラフトマスの首長は“我々は、スチール・ヘッドたちが通り過ぎた後に、スキーナ川とナス川に上るつもりである”と答えた。

またマスノスケ達はゆっくりゆっくり進んだ。そしてスキーナ川とナス川のそば、ダグラス島とステファンズ島の内側でしばらく休んだ後、マスノスケの首長は立ち上がり、みんなに次のように尋ねた。“今からおまえ達に尋ねるが、これに答えるように。”そういって、どの川を上るかを4組に分けて決めさせた。なかなか決まらなかったが、結局みんなそろって首長に従いGitslala's Er峡谷を上ることにした。そしてサケへと変じたマスノスケの首長は、王子を胃の中に入れて王子の村に運ぶことにした。

その時王子の住んでいた人間の村では、王子の父である首長が、シャーマンを使って占わせていた。シャーマンは呪文を唱え、踊ってこう託宣した。“まもなくマスノスケの首長が王子を連れて川を遡ってくる。それで、動物を捕まえるための呪術的な精進の方法を知っている勇者に、その力を冬の間中持ち続けるように命じなさい。そしてあなた（首長）は、マスノスケの遡上が終わるまで奥さんを遠ざけなさい。私は家の中で毎日呪文を唱える。サケを捕るための網は年とった女

に作らせなさい。若い女は汚れているのでやらせてはならない。”シャーマンの託宣に従い、首長はサケ漁の準備にとりかかった。

マスノスケ達は、徐々にGitslala's Er峡谷の入り口付近に到達しつつあった。シャーマンは玄影の中で、マスノスケが峡谷の入り口付近で休んでいる光景を見た。それ故、人々にサケを捕らえる梁などの道具を仕掛けるように命じ、マスノスケがいつ来てもよいように準備万端整え、ついに漁を始めた。マスノスケ達は上り始め、ついに人間達の待つ漁場へとさしかかった。人々は多くのマスノスケを掬い上げる。首長の網にも多くのマスノスケがかかる。しかし、シャーマンの網にだけは1匹もかからない。

この時、サケの首長はシャーマンの張っている網がすべての峡谷を塞いでいることがわかり、峡谷を上る術がないことをさとった。そこで覚悟を決めたマスノスケの首長は胃の中の王子に向かって次のように告げて、シャーマンの網へと突っ込んでいった。“王子よ。あなたのお父さんに、私を干しサケにさせてはならない。老若男女集めて、私をすぐに食べさせよ。そして残った骨は火に投げ込み、食べた後すぐに水を飲むのだ。”

シャーマンの網に巨大なマスノスケがかかった。1人で持ち上げることもできないくらい大きいため、仲間にも手伝ってもらって梁へと引き上げる。その時、シャーマンの超自然的守護者が梁にやって来て、彼にこう伝えた。“これはマスノスケの首長である。行方知れずの王子がその胃の中に入っている。王子を傷つけないために、首長を魚叩棒で強く叩いてはならない。”みんなはマスノスケの首長を引き上げ、ゆっくりと大事に横たえた。

シャーマンはみんなとともにこれを首長の家へ運び、不浄な若者を除いた人々を集めて呪術を執り行った。そしてとても年をとった2人の女に命じて、ムラサキイガいのナイフでその体を切らせた。彼女たちは呪言を唱えながら刃先を進める。ゆっくりとナイフを進め、胃袋を取り出した。胃袋を切ると中から小さな少年が現れた。それを優しく取り上げて、呪術を続けるシャーマン

マン達のところへ持っていった。親指大の小さな子どもの回りで、ガラガラを持って走り回ったり、吟唱したり様々な呪術が試みられた。シャーマン達の祈りが終わりを迎えた頃、王子はぐんぐん大きくなり始め、ついにもとの姿へと戻ることができた。

王子は、みんなに自分がマスノスケに連れていかれたいきさつを話した。みんなは驚きの余り、沈黙している。王子は母の方を向き直し、次のように伝えた。“お母さん。干しサケを長い間あなたの箱の中に入れてままにしてはなりません。そして、どんなサケでも料理する時は必ず骨を火の中に投じ、食後すぐに水を飲んで下さい。そうすることによってサケは家へと帰り、再び生き返るのです。また、人間達がサケを切るときには最初に頭を、次いで尾を切り取らねばならないとも、マスノスケの首長にいわれました。尾を切る際には、決して手でむしるようなことはなく、ムラサキイガイのナイフを用いるように。石製、骨製のナイフは使ってはなりません。そうすると稲光がおこり、大雨が降って、災害をもたらすでしょう。”

この言葉を伝えた王子はやがて死んでしまった。その棺を墓に持っていった夜、マスノスケの首長に命じられたサケの人々が、王子を迎えに川を上ってきて、彼をサケの村へと導いた。そこで再び王子はサケの人として蘇り、マスノスケの首長とともに暮らした。』(Boas 1916: 194-205、引用者要約、傍線引用者)

### ③「サケがスコームッシュ川に来るようになった理由」

#### Coast Salish族

「昔、動物と人間は全く同じであった。そこにはよき行いをすることに励む4人の兄弟がいた。彼らはいつもカヌーで旅をして回っていた。そのカヌーは普通ではない。兄弟の内最も若い弟が、この船へと姿を変えたものであった。ある時、スコームッシュの人々のところへ訪れた。彼らは、そこの首長にしばらく滞在するように説得された。不思議な力をこの兄弟達が持っていることを知っている首長は、彼らに次のように頼んだ。“サケの人々を我々の岸辺に導いてもらえないであろうか。我々はたびたび食糧にも事欠いている。

我々はサケが食糧として適していることは知っているのだが、いかんせん私たちの水辺にはやってこない。”これを聞いた長男は“私たちがサケの人々を説得しましょう”と答えた。“彼らは一体どこに住んでいるのだろうか。スヌーカム(太陽)に尋ねなければならないようだ。”

しかし、太陽に尋ねるためにそれへ近づくことはとても難しかった。何度も失敗を繰り返しながらも、奮闘努力の結果、4人の兄弟はようやく太陽を捕まえ、サケの人々の住処を聞き出すことができた。太陽がいうには、サケの人々の住処はここから遙か遠く西の方だという。そしてそこに訪れるためには、まず多くの呪薬を用意しなければならないことを教えてくれた。早速、呪薬を用意した4兄弟は、スコームッシュの人々に向かって“さあ、あなた方の船を出して、長い航海の準備をなさい。我々は、明日の日の出とともに、サケの人々のもとへ出発する。”と告げた。

次の朝、彼らは全員、西方を目指して出発した。何日も何日も櫂をこぎ進んだ結果、ようやく1つの島の近くへたどり着いた。しかし、島の回りにはおびただしい数の木炭が浮いているために容易に上陸できない。あるスコームッシュの若者が、その上を歩いてわたろうと試みたが、足を滑らせて水中へ落ちてしまった。そのため、島の反対側に回ってみると、そこには煙をたなびかせる村があった。“これは、我々が探し求めていた国に違いない。太陽がいていたサケの人々の村だ。”ということで、この村へと進んでいった。到着後、4人の兄弟は用意しておいた呪薬をサケの人々の首長に贈ったところ、友好的に迎え入れることができた。

村の裏手を流れる川には、サケの人々が仕掛けた梁があった。4人の兄弟とスコームッシュの人々が上陸するちょっと前に、サケの首長はサケの人々の内4人の若者(2人の少年と2人の少女)に命じて、川に入らせ、仕掛けてある梁に入らせた。この指示に従って、4人のサケの若者は、衣服を脱ぎ捨て、水に飛び込んだ。すると、水に入るやいなや彼らの顔はサケになり、遡上期のサケがやるように飛び跳ねながら、梁の中へと



入っていった。

さて、この村を訪れた4人の兄弟達をもてなすこととなった。サケの首長は、梁に入っているサケを捕ってこらせて、客のためにきれいに焼き上げ料理した。遠来の客を招待し、彼らに向かって次のように語った。“望むだけ食べてよい。しかし、どんな小さな骨も捨ててはならない。注意深く置いて、どんな小さな骨も壊してはならない。”

スコームッシュの人々と4人の兄弟達は、もてなしに喜び、首長の言に従ってめいめい焼いたサケを食べ始めた。ただ、首長のいった骨をとっておけという言葉の意味が分からなかった。

食後、サケの若者が客の残した骨を注意深く集め、岸辺に持って行って水に投げ込んだ。すると数分後、先に水に飛び込んだ4人のサケの若者たちが、水の中から現れた。それから4日間サケの首長は客をサケでもてなした。

4日目になって、招待客のある若者が、骨の取り扱いを不思議に思って、こっそりとこれを隠してみることにした。食べた後いつもの手順で残った骨は水に投げられた。しばらく後、4人の人々が水から出てきた。しかし彼らの1人が顔を手で覆い隠している。近づいたサケの首長に向かって、彼は“すべての骨が集められていません。私の頬と鼻の分がない。”と訴えた。客の方を向いて首長は尋ねた。“あなた達の誰かがサケの骨を置き忘れていないか。いくつかなくなっている。”そういって、頬と鼻の分がない若者の顔を指さした。これに驚いた骨を隠したスコームッシュの若者は、地面に落ちている骨を見つけたと偽って差し出した。これによって、この村の人々がサケの人々であることが判った。

しばらくして、多くのカモメ達が岸辺からさほど遠くないところに浮かんでいるなにかに群がっている。サケの首長は、自分の家来に命じて何事がおこったのか調べさせた。家来は帰ってくると、前に上陸しようとして木炭の上を歩き、足を滑らせ溺れ死んだスコームッシュの若者であることを報告した。この死体は、岸

辺に引き上げられたが眼が失われていた。4人の兄弟は死体を生き返らせる力を持っているものの、眼をもとには戻せない。それで、サケの首長に“新しい2つの眼をいただけませんか”と頼んだ。すると首長は承知し、最初にベニザケの眼をはめてみた。これは小さすぎた。次にギンザケの眼をはめてみたが、これもまた小さすぎた。それから新しいシロザケの眼を選んだら、これがぴったり合う大きさであった。そして、4人の兄弟の長男は呪薬を死体にふりかけると、再び生き返った。

長男はここで、サケの首長に向かってさらに願いを述べた。“首長。我々があなたのもとを訪れたのには特別なわけがあるのです。我々はあなた達サケの人々が、スコームッシュの川を訪れてくれるよう頼みに来たのです。私の友人であるスコームッシュの人々は貧乏で、頻繁に飢えています。ときどき彼らを訪れてくれましたら、大いに感謝いたします。”この求めに対し、サケの首長は快く承諾した。“ただし、ここで見たように残った骨をすべて水に投げ戻さねばならない。骨を大切に扱えば、サケの人々は人間の世界を訪れた後に、再び我々のもとに戻ることができる。”とつけ加えた。4人の兄弟、そしてスコームッシュの人々はこれを守ることを約束した。

それから彼らは、太陽の沈む方向へ海を渡って帰郷する準備をした。出発間際、サケの首長は、“私は、季節の最初にマスノスケをあなた達のもとへと送ろう。その後でベニザケを、そしてギンザケを、それからシロザケを、最後にカラフトマスを送ろう。”と、告げた。

昔々のその時以来、スコームッシュの人々のもとには、たくさんの種類のサケが訪れるようになり、人々はいつも骨を注意深く水の中に戻すようになった。これは、スコームッシュで彫られたサケの首長像にまつわる話である。](Clark 1960 : 29-33, Ashwell 1978 : 40-42、引用者要約、傍線引用者)

Tlingit族に伝わる話には、サケの村へ連れていかれた少年が、サケの人々に自分たちを食べるように進められ、その残滓の取り扱いについて、川に流すという

行為が伝授されるモチーフが存在する。②のTsimshian族の話には、同じくサケの村へ赴いた王子が、サケの人々に自分たちを食べるように進められ、その残滓の取り扱いについて、火に投ずるという行為が伝授されるモチーフが存在する。さらに、肉を人間が保存したために完全な肉体となり得ない話、水を飲むと再び生き返る話が付加されている。③のCoast Salish族の話は、サケの利用方法の由来譚となっており、食後の水へ流す行為の理由をさらに端的に解説している。いずれにも、残滓の一部を流し損ねたために、サケの人々の復活が不完全なものになる場面が描かれている。

以上のような、サケの骨や肉体の一部を水中や火中に投じることによって、再びそのサケが生き返るというモチーフを持つ話は、北はTlingit族、南はCoast Salish族まで分布している。サケが人間に利用された後、再生するとする類話はTsimshian族を含め、Haida族、Kwakiutl族、Nootka族などでも散見することができ(Docherty 1986: 189)、北西海岸ネイティブのサケをめぐる口承文芸に一般的にみられるモチーフといえる。

本稿で紹介した初サケ儀礼や口承文芸には、人間世界と対置してサケの世界が存在するという、北西海岸ネイティブのサケをめぐる世界観が直接的に表出している。そして、それらには、サケが人間世界を来訪し、その肉を人間が食糧として利用し—すなわちサケは死を迎える—、肉体を換喩的に代表する骨や皮を、サケの世界へ送り返すことによって再び生き返えらせるという、生と死の循環論理がかなり明確に語られている。

前稿で、北海道のアイヌにおいてもこのような論理が儀礼、口承文芸に投影されていることを指摘したが、そこでは魚叩棒・魚叩行為をめぐる「死の儀礼」、あるいは「死の神話」を中心に語られていた(菅 1994: 29-33)。その中では魚叩棒・魚叩行為に関する規則、禁忌が細かく構成されていた。しかし、アイヌでは、サケの肉体の一部を送り返す行為が初サケ儀礼で行われ、また魚叩棒を使用する理由を述べた口承文芸にもこの行為が登場するものの、北西海岸ネイティブと比較し

てみると、その厳密さ、精緻さに不足しているといっても過言ではない。

一方、北西海岸ネイティブでは「生の儀礼(初サケ儀礼)」、あるいは「生の神話(上記の3つの話のような)」を中心に、サケの生と死の循環論理が語られ、精緻な構成体となっているものの、魚叩棒・魚叩行為をめぐる「死の儀礼」については、アイヌほど明確には現れてこない。アイヌには、その口承文芸の中に、特定の魚叩棒を使用せねばならないことを説明する由来譚が存在したが、同様のものは筆者の管見の限り北西海岸ネイティブには見いだすことはできない。ただ②の話のように、サケを利用する際に、魚叩棒を使用する場面が描かれているのみである。

また、アイヌでは魚叩棒の材質、意匠、取り扱い、使用時の呪言などに特有の取り決めや、儀礼性が規定されていた。かたや北西海岸ネイティブではその意匠において重要な儀礼性(霊的な力を彫り込む)が読みとれるものの、その他の部分ではアイヌほどの厳密さに欠けている。このような違いが、アイヌと北西海岸ネイティブとの資料の量、濃淡の差によって生じた可能性も否めないが、根本的な部分でサケを支配する神観念の違い、それをめぐるサケの靈魂観の構成法の違いが反映していると考えた方がよさそうである。

アイヌも北西海岸ネイティブもともに、サケに対して複雑な儀礼複合体を形成し、永遠不滅のサケの靈魂観、そしてそれに裏打ちされた永遠回帰のサケの遡上という思考を共通して持っている。それにもかかわらず、その力点の置かれる部分が異なっているために、魚叩棒の呪具的意義、魚叩行為の呪術的意義は相違をみせているのである。アイヌの魚叩棒はサケを支配する神への贈り物としてとらえられ、魚叩行為は靈魂の送り返し儀礼である。北西海岸ネイティブの魚叩棒はサケを支配する神自体を象ったもので、魚叩行為には靈魂の送り返し儀礼の要素は希薄である。その分、北西海岸ネイティブにおいては初サケ儀礼が主として、靈魂の送り返し儀礼の意味を担っているのである。

(以下次号)

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、北海道立北方民族博物館齋藤玲子氏には資料提供等のご高配を賜った。末筆ながら深謝する次第である。

### (註)

- 1) 本稿で取り扱う北西海岸ネイティブは、通常、「北西海岸インディアン」、「北太平洋沿岸インディアン」などと呼ばれている。これを本稿ではカナダ沿岸を中心とした7ネイティブに限定しているが、必ずしもこの見解が確定しているものではなく、オレゴン・チヌーク諸族などさらに南部にまでこの名称を広げる見解もある(青木 1979: 98)。なお、本稿で使用するネイティブという表現は、「インディアン」という表現とtrib=「部族」という表現の2面的な意味を持つ。本稿では現在のネイティブの置かれた状況に鑑み、引用の都合、あるいは対象を明確にする必要がある時以外は、「インディアン」「部族」という表現は極力避けている。またtrib=「部族」という表現は、この地域の文化を把握する上で非常に曖昧である。この表現が北西海岸ネイティブを語る多くの民族誌の中では、2種類の意味を持って使用され、この地の民族を語る上でしばしば混乱をもたらしていることを益子待也は指摘している(益子 1990: 174-175)。彼が指摘するように多くの民族誌、論考に登場する部族名は、ひとつに言語学的に他集団と明確に区別される集団(例えば本稿に登場するTlingit族やKwakiutl族、Haida族、Nootka族など)を指し示すとともに、さらに細分化して一定の居住地域を占めている地縁集団(例えば本稿に登場するKwakiutl族のBella BellaやOwikeno、Tsimshian族のGitskan、Nootka族のMakah、Coast Salish族のCowichanやSquamishなど)をも指し示す。英文の表記上、この範疇の違いを考慮せず並列的に取り扱ったものも少なくない。したがって、本稿では前者をネイティブと表現し、ネイティブ名の最後には「～族」と付し、後者を「地

方集団」と表現し、最後には何もつけないという表記法を採っている。

- 2) アルゴンキン・インディアンの言葉に由来するという「エスキモー(生肉を食らう輩)」という民族名称は、現在のカナダ国内では差別語とされて「イヌイット(人間)」と改められている。しかし、本来「イヌイット」に該当するのは、グリーンランドからカナダ、北アラスカにかけてのツンドラ地帯に居住する人々である。現在でもアラスカでは総称として「イヌイット」が用いられず、「エスキモー」が正式な名称となっている(Burch 1991: 9-14)。したがって、本稿に登場する「エスキモー」は、アラスカ南海岸部に居住するものを指し示すために、「エスキモー」という名称をもってこれを表現する。
- 3) アサパスカ語族は3つの語派に分かれ、広範な分布を持っているが、本稿ではアラスカや、カナダ北西部などに分布する北方アサパスカ語派を指し示す。具体的には、Chilcotin族、Carrier族、Tahltan族、Sekani族などである。
- 4) 前稿で紹介したアイヌの魚叩棒は、打頭部と握りの直径にあまり差がないものが多く、これに直棒型という名称を与えた。本稿では、握り・打頭部の太さ、長さ、それと明確に打頭部が湧り削られているかどうかといった視点から、ハンマー型、バット型に分類し、非ハンマー・バットの形式を有するものには分類名称を与えていない。資料的に正確な直径、全長が明示されているサンプルが少ないため、その分類は厳密なものではない。大まかに、打頭部の直径が握りに比べて大きく、打頭部の長さが全長の中で占める割合が少ないもの、あるいは打頭部を握り、柄と明らかに分けて太く削り残してあるものをハンマー型と称し、打頭部が握りに比べて太いがそれほどの差はなく連続しているものをバット型と称している。非ハンマー・バットの形式を有するものは、主に装飾が工夫されているものに多く、全体のシルエットが

かなり複雑になっている。

5) この地域でイエロー・シダーと呼ばれている樹木には *Juniperus occidentalis* というビャクシン属の木と、*Chamaecyparis nootkatensis* というヒノキ属の木がある (益子 1990: 175-176)。

6) 本文中でも述べたように、北西海岸ネイティブの魚叩棒は、特にサケだけに用いられるのではなく、オヒョウなどの大型魚、アザラシ、ラッコなどの海獣類を撲殺するときなどにも流用されることが多い。国立民族学博物館には「Seal killer (アザラシ殺し)」という現地名称を持った全長445ミリ、打頭部の厚さ55ミリの魚叩棒が収蔵されている (巻末写真13参照)。これは、バンクーバーで収集されたが、エスキモーが使用していたものと推定されているため本稿では除外した。外見はハンマー型に分類される。ただし、木製の柄部に丸い石製の打頭部が接合されており、このような工夫は筆者の管見の限りにおいて北西海岸ネイティブには見受けられない。重い石を打頭部に用いていることから、木製のものに比べ打頭力は大きいと考えられる。エスキモーのサブシステム、及び打頭力の大きさからいってアザラシ猟に専門に用いられた可能性もある。

本稿ではサケ魚に使用する魚叩棒を中心に考察しているが、その呪具的意味、魚叩棒の呪的意味は何もサケに限られたものではない。オヒョウ漁などをやっている時、たまたまサメがかかることがあるが、これを魚叩棒で叩くと悪いことが起こるので、それを禁止するタブーなども Tlingit 族には存在している (Emmons 1991: 117)。

前号で筆者は、アイヌの魚叩棒が闘争用の棍棒から変化したという知里真志保の見解を取り上げ、魚叩棒の背景にある“打つ行為”の儀礼文化の重要性を指摘したが (菅1994: 34-35)、これは北西海岸ネイティブでも同様である。北西海岸ネイティブでは、戦闘用の武器として棍棒が使用されており、また儀礼的に奴隷を殺傷する道具として

も棍棒が用いられた。例えば、ポトラッチの際に奴隷を殺したり、新築儀礼で奴隷を犠牲にする際には「slave killer」と呼ばれる特別な棍棒が使用される。その棍棒は形状、大きさ、材質など様々であるが、中にはアザラシや魚を叩く魚叩棒と非常によく似た、動物を表面に装飾彫刻した短い棍棒もあった (Emmons 1991: 338)。アイヌ、北西海岸ネイティブの魚叩棒は、共通した“打つ行為”の儀礼的な文脈で考える余地が十分にある。

- 7) 本稿ではホーソンが紹介した魚叩棒 (Hawthorn 1979: 85) を提示したが、全く同じものと思われる魚叩棒のスケッチが、ヒラリー・スチュアートによっても紹介されている。しかし、ホーソンがこの魚叩棒を Kwakiutl 族の事例として報告しているのに対し、スチュアートは Bella Coola 族の事例としている (Stewart 1977: 63)。本稿では便宜上、Kwakiutl 族の事例として分類した。また、スチュアートの報告の日本語翻訳版には、Tlingit 族の事例と記してあるが (Stewart 1987: 54)、こちらの方は明らかに誤表記である。
- 8) 事例17と同様に、打頭部に丸い石をつかんだ拳をモチーフとした写實的、立体的な棒が、同じ Kwakiutl 族のものとしてホーソンによって報告されている。これは名称としては「Club」としか記載されておらず、その用途についても一切ふれられていない (巻末写真14参照、Hawthorn 1979: 85)。事例17との類縁関係からいって、魚叩棒、あるいはその他の動物を絶命させる打頭棒とも考えられる。全長368ミリ。
- 9) 北西海岸ネイティブの伝統的な魚叩棒の中には、この直棒型を見いだすことはできないが、現在のこの地域の非ネイティブの使用する魚叩棒には、この形式のものも見受けられる。写真15の直棒型の魚叩棒はバンクーバー島のキャンベル・リバーの漁師が使用しているもので、表面に「LUNKER BONKER (いかれた大物)」と書かれている (巻末写真15参照)。

10) エスキモーではSedna以外にも、複雑な神性を持つMoon-manや巨大なシロクマといった超自然的な海洋動物の支配者が信じられている (Hultkrantz 1984: 872-873)。

11) 儀礼的な道具としての魚叩棒の重要性は、アンダーヒル (Underhill 1978: 26) やドチャティー (Docherty 1986: 21) などによっても指摘されている。

12) Coast Salish族の内陸に位置するInterior Salish族のLillooetという地方集団には、初サケの取り扱いを規則通りに行わなかったために、女が岩に変えられた次のような話が<sup>3</sup>残っている。「昔々、ある時。フレーザー川にサケの<sup>3</sup>遡上が非常に遅れた年があった。長い荒涼たる冬の後、干しサケを食べ尽くす前の夏の間次食糧を準備しなければならなかった。根菜やベリーは熟すのが遅い。また、敵対する部族が<sup>3</sup>狩りをしていて危険なため、この辺りでは狩りの獲物が<sup>3</sup>減多に手に入らなかった。イエールの村人は食糧をととても希求していた。

Sta-eelという女性は、飢えた子どもを抱え困っていた。ある日、彼女の夫は山へ<sup>3</sup>猟に出かけ、彼女はサケを捕まえようと、網を持って川へいった。しかし、彼女はサケがかかるなどは期待していなかった。何故なら、下流の人々から川にはサケがないことが知らされていたからである。しかし、彼女は網で川を<sup>3</sup>涸い始めた。2回<sup>3</sup>掬って、3回<sup>3</sup>掬って、そして4回<sup>3</sup>掬った時、彼女は驚いたとともにとても喜んだ。なんとすばらしいサケか<sup>3</sup>かかったのである。

彼女はシーズン最初に到来した初サケについての部族の<sup>3</sup>掬、部族の習慣を知っていた。しかし、それには従わずすぐに藪の中にこれを隠してしまった。そして、暗くなってからこの初サケを取りに来て、家へ持って帰ってしまった。彼女はこっそりとこれを煮て、子ども達に与えた。飢えているためにみんなはこれを貪り食った。

彼女達が最後の1かじりをしている頃、突然稲光が起り、暗雲が空を覆い始めた。そして、猛烈な風が、木々の小枝と川の水面を激しく叩き始めた。

村の呪医たちは、誰かが<sup>3</sup>精霊を怒らせたことを知った。その精霊は多分サケと川の精霊であろう。彼らは、<sup>3</sup>精霊の激怒をなだめるため、またサケの<sup>3</sup>遡上のために<sup>3</sup>荘厳な唱え言を吟じ始めた。しかし、唱え言は効かなかった。嵐は激しくなる一方で、風は益々強くなり、川の波も益々高くなっていった。人々は恐ろしげに眺めるばかりであった。

突然、Sta-eelは、テントの中からつむじ風にさらわれ、天空へと舞上げられた。驚いた隣人達は彼女が空に浮かび、ついには川の中程に落ちていくのを見つめるばかりであった。怒れる波が彼女の体をつかみ、水中へと隠してしまった。しばらく川を見ていると、彼女の姿を見失った辺りから岩が<sup>3</sup>現れ始め、最終的に大きく高くそびえる岩になった。

呪医や他の人々は、Sta-eelの子ども達から、彼女が何をしたのか聞いた。それで、みんな何が<sup>3</sup>おこったのか判った。彼女の体がその罪ゆえに岩へと姿を変え、部族の掬に従うよう人々に警告しているのである。

今でも人々はSta-eelの岩を見るたびに、初サケを<sup>3</sup>恭しい祝祭でもてなさなければならないことを思い出す。岩のそばの山から7本の流れが<sup>3</sup>落ちているが、人々はこれをSta-eelが<sup>3</sup>育てていた7人の子どもの<sup>3</sup>涙だといっている。」(Clark 1960: 106-107)

13) ヒラリー・スチュアートは、この儀礼がHaida族やTlingit族など北方の部族では行われていなかったと指摘しており (Stewart 1977: 168)、デ・ラグーナもTlingit族にはその儀礼が<sup>3</sup>明らかに欠如していることを指摘している (De Laguna 1991: 105)。また、初サケ儀礼の分析に熱心であったガンサーも同様の見解を示しているが、た

だしHaida族にはその残存と思われる習俗が存在するという(Gunther 1928: 138)。ガンサーの提示する初サケ儀礼の分布によると、北は不明であるが、南は北西海岸ネイティブから遠く離れた、カリフォルニア南部にまで広がる。

本文で魚叩棒が、その土地の様式的な儀礼複合体に規定され、当然、民族文化のありようの違いによって表出する姿は変えられたことを指摘したが、初サケ儀礼も同様な構成が行われ豊かなバリエーションを持っている。特に、ベリー類の初果儀礼、クマ儀礼などとの儀礼的な借用、援用、逆に貸与関係が明らかにされている(Gunther 1928: 156-159)。

- 14) Kwakiutl族では、オヒョウ、ユーラコン(キャンドルフィッシュとも呼ばれるニシン目キュウリウオ科の魚。油を取る。)などの初魚を祝う儀礼が執り行われていた(Stewart 1977: 168-171)。その際、オヒョウなどはサケと同じように、残った骨や内臓が水中に投げられた。

引用・参考文献

1. 青木晴夫、1979：「アメリカ・インディアン」（講談社）
2. 大林太良、1992：「北太平洋地域の神話と儀礼における鮭」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1（北海道立北方民族博物館）
3. 菅 豊、1986：「漁撈民俗試論－儀礼としての漁撈活動について」『民俗学評論』26（大塚民俗学会）  
1990：「鮭をめぐる民俗的世界－北方文化に見られる死と再生のモデル」『列島の文化史』7（日本エディタースクール出版部）  
1992：「サケをめぐる宗教的世界－民間宗教者の儀礼生成に果たした役割についての一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』40  
1994：「呪具としての魚叩棒・呪術としての魚叩行為」『動物考古学』3（動物考古学研究会）
4. 谷 元旦、1799：「蝦夷器具図式」（本稿では大塚和義監修『蝦夷風俗図式・蝦夷器具図式・復刻版』（安達美術）によった。）
5. 益子待也、1990：「訳註」（Goddard他著、『北西海岸インディアンの美術と文化』、六甲出版）
6. 渡辺 仁、1990：『縄文式階層化社会』（六甲出版）
7. Ashwell, Reg、1977：Indian Tribes. Hancock House Publishers.  
1978：Coast Salish. Hancock House Publishers.
8. Boas, Franz、1916：Tsimshian Mythology. Bulletin of Bureau of American Ethnology 31, Smithsonian Institution.  
1921：Ethnology of the Kwakiutl. Report of Bureau of American Ethnology 35, Smithsonian Institution.  
1935：Kwakiutl Culture as Reflected in Mythology. Memoirs of the American Folklore Society.  
1964：The Central Eskimo(2nd ed). Lincoln(First published 1888).  
1966：Kwakiutl Ethnography. University of Chicago press.
9. Burch, Ernest S、1991：『エスキモーの民族誌』（スチュアート・ヘンリ訳、原書房）
10. Clark, Ella Elizabeth、1960：Indian Legends of Canada. McClelland and Stewart Inc.
11. De Laguna, Frederica、1991：Note.(Emmons, The Tlingit Indians. Douglas and McIntyre.)
12. Docherty, Shannon Aileen、1986：Parallels between the Bear and Salmon Tales of the Ainu of Japan and the Native Americans of the Northwest Coast. UMI Dissertation Services.
13. Drew, Leslie、1982：Haida. Hancock House Publishers.
14. Emmons, George Thornton、1991：The Tlingit Indians. Douglas & McIntyre.
15. Fitzhugh, William and Crowell, Aron、1988：Crossroads of Continents ;Cultures of Siberia and Alaska, Smithsonian Institution Press.
16. Goddard, Pliny Earle、1974：『北西海岸インディアンの美術と文化』（益子、菊池訳、六甲出版）
17. Gunther, Erna、1926：An Analysis of the First Salmon Ceremony. American Anthropologist 28.  
1928：A Further Analysis of the First Salmon Ceremony. University of Washington Publications in Anthropology 2-5, University of Washington Press.  
1945：Ethnobotany of Western Washington. University of Washington Publications in Anthropology 10-1, University of Washington Press.

18. Hawthorn, Audrey, 1979 : Kwakiutl Art. University of Washington Press.
19. Hill-Tout, Charles, 1904 : Report on Ethnology of the Siciatl [Sechelt] of British Columbia, A Coast Division of the Salish Stock. Journal of the Royal Anthropological Institute 34.  
(なお本稿ではRalph Maud ed.1978 : The Salish People. Talon-booksによった)
20. Holm, Bill, 1965 : Northwest Coast Indian Art. University of Washington Press.
21. Hultkrantz, Ake, 1957 : The North American Indian Orpheus Tradition. Statens Etnografiska Museum, Monograph Series.  
1984 : Supernatural Beings of Fish and Fishing in Aboriginal North America. The Fishing Culture of the World(B.Gunda ed.), Akademiai Kiado.
22. Inverarity, Robert Bruce, 1950 : Art of the Northwest Coast Indians. University of California Press.
23. Irwin M.D., R.Stephen, 1984 : Hunters of the Sea. Hancock House Publishers.
24. McKervill, Hugh W., 1967 : The Salmon People. Gray's Publishing.
25. McMillan, Alan D., 1988 : Native Peoples and Cultures of Canada. Douglas & McIntyre.
26. Stewart, Hilary, 1973 : Artifacts of the Northwest Coast Indians. Hancock House Publishers.  
1977 : Indian Fishing. University of Washington Press.  
1987 : 『海と川のインディアン』(木村訳、雄山閣)
27. Suttles, Wayne, 1955 : Katzie Ethnographic Notes. British Columbia Provincial Museum.
28. Swanton, John R., 1908 : Social Condition, Beliefs, and Linguistic Relationships of the Tlingit Indians. Annual Report of the Bureau of American Ethnology 26, Smithsonian Institution.  
1909 : Tlingit Myths and Texts. Bulletin of Bureau of American Ethnology 39, Smithsonian Institution.
29. Teit, James, 1900 : The Thompson Indians of British Columbia. Memoirs of the American Museum of Natural History 2-4  
1930 : The Lillooet Indians. Memoirs of the American Museum of Natural History 4-5
30. Underhill, Ruth, 1945 : Indians of the Pacific Northwest. United States Department of Interior.



写真1 事例1「Wooden Club」(Tlingit族、デンバー美術博物館所蔵、Holm 1965:17より転載)

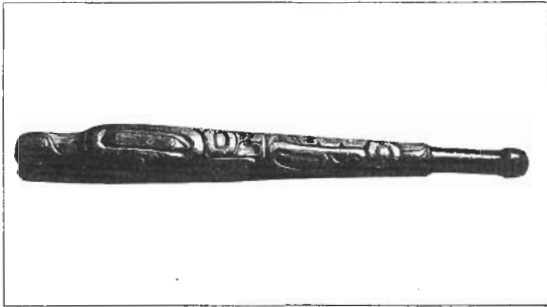


写真2 事例2「Fish Club」(Tlingit族、ワシントン州立博物館(シアトル)所蔵、Inverarity 1950:153より転載)

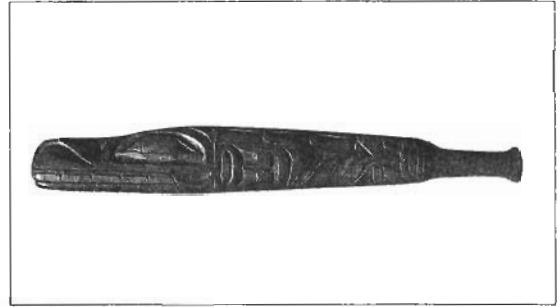


図2 事例2「Club」(Tlingit族、ワシントン州立博物館(シアトル)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

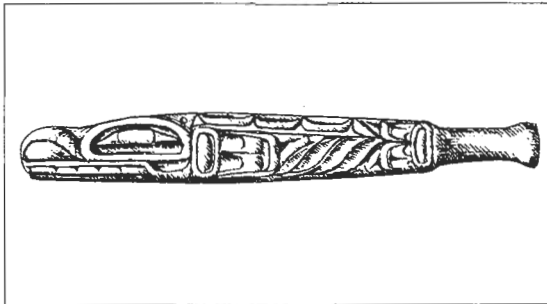


写真3 事例3「Killer Whale Fish Club」(Tlingit族、国立自然史博物館(ワシントン, D.C)所蔵、Fitzhugh and Crowell 1988:295より転載)

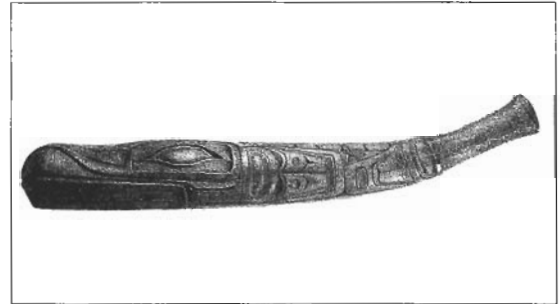


図3 事例4「Club」(Tlingit族、プリミティブ・アート博物館(ニューヨーク)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

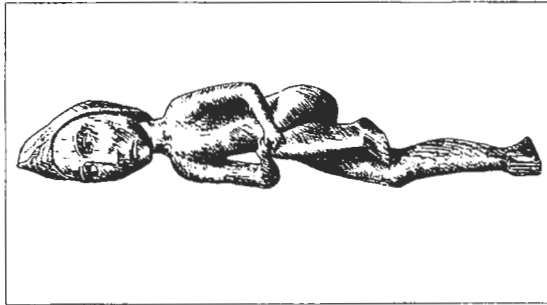


写真4 事例5「Fishing Club」(Haida族、所蔵者不詳、Drew 1982:36より転載)



図4 事例6「Club」(Haida族、国立人類学博物館(オタワ)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

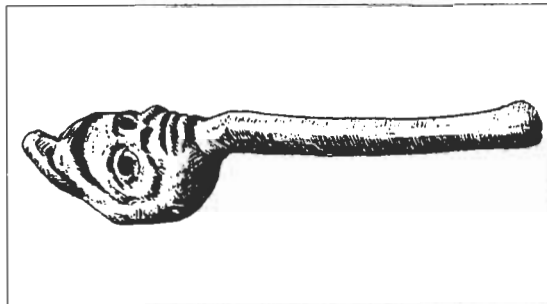


図5 事例7「Club」(Haida族、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

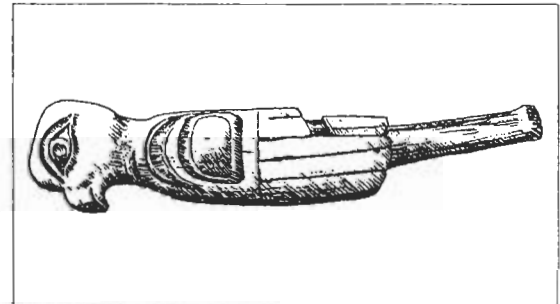


図6 事例8「Club」(Haida族、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

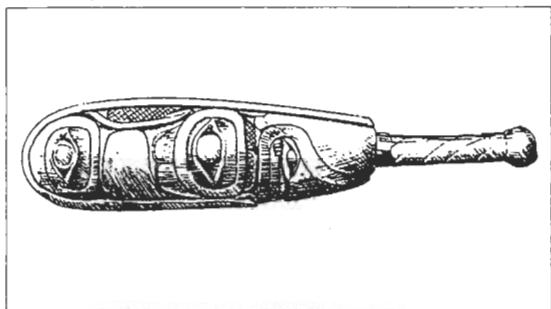


写真6 事例11「Club」(Tsimshian族、北海道立北方民族博物館所蔵)

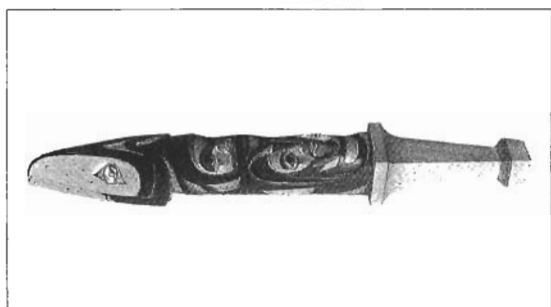


写真8 事例13「Fish Club」(Kwakiut族、プリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館(バンクーバー)所蔵、Hawthorn 1979:85より転載)

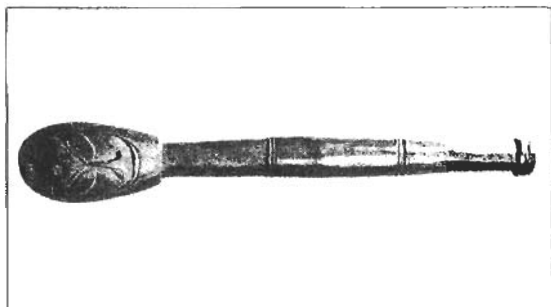


写真10 事例15「殺魚棒」(Kwakiut族、国立民族学博物館所蔵)

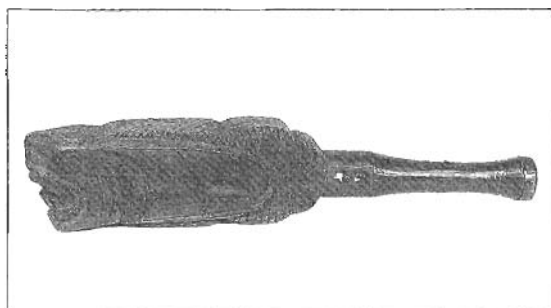


写真5 上: 事例9「Halibut Fish Club」(Tsimshian族、北海道立北方民族博物館所蔵)  
下: 事例10「Sea Lion Fish Club」(Tsimshian族、北海道立北方民族博物館所蔵)

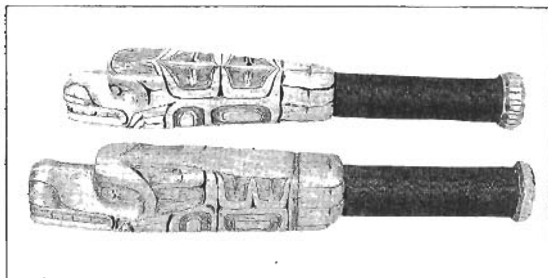


写真7 事例12「Seal Club」(Kwakiut族、ネイティブ伝統文化センター(ダンカン)所蔵)

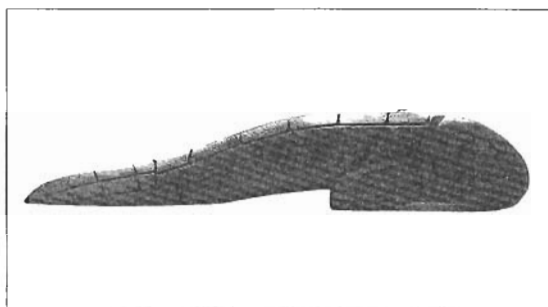


写真9 事例14「殺魚棒」(Kwakiut族、国立民族学博物館所蔵)

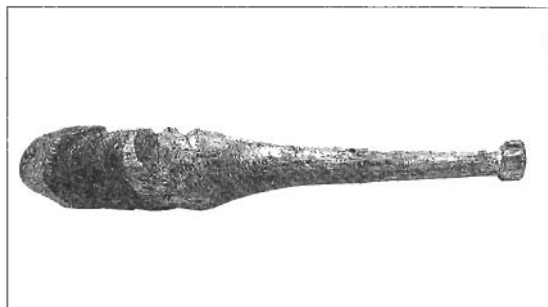


図7 事例16「Club」(Kwakiut族、プリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館(バンクーバー)所蔵、Stewart 1977:62より転載)

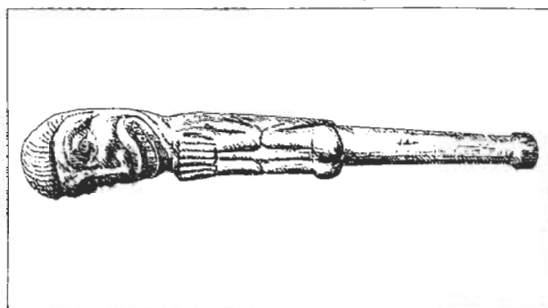


図8 事例17「Club」(Kwakiutl族、国立人類学博物館(オタワ)所蔵、Stewart 1977:63より転載)

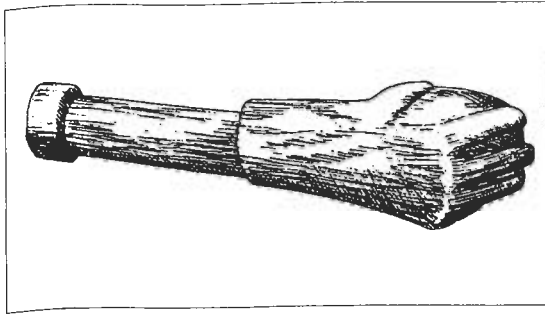


図9 事例18「Club」(Kwakiutl族、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵、Stewart 1977:63より転載)

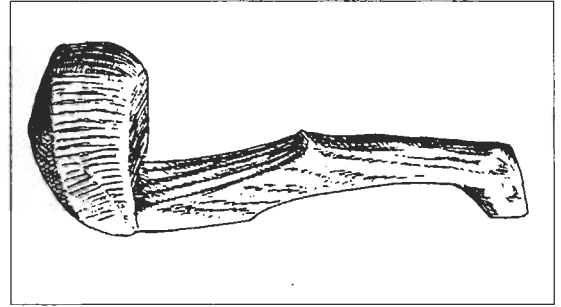


図10 事例19「Club」(Kwakiutl族、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)所蔵、Stewart 1977:63より転載)

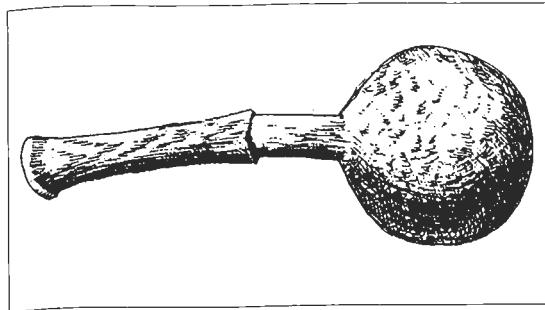


写真11 事例20「Fish Killing Club」(Nootka族、国立民族学博物館所蔵)

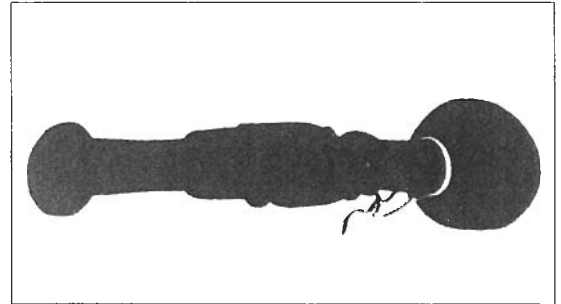


図11 事例21「Club」(Nootka族、ワシントン州立博物館(シアトル)所蔵、Stewart 1977:63より転載)

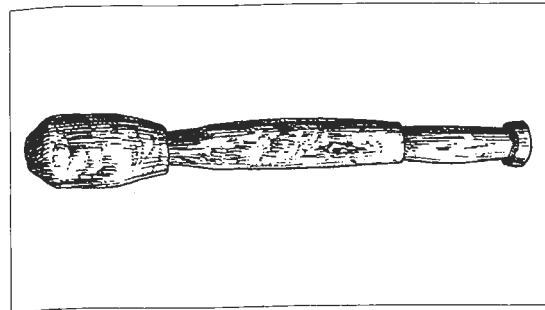


図12 事例22「Sturgeon Club」(Coast Salish族、ブリティッシュ・コロンビア州立博物館(ビクトリア)所蔵、Stewart 1977:63より転載)

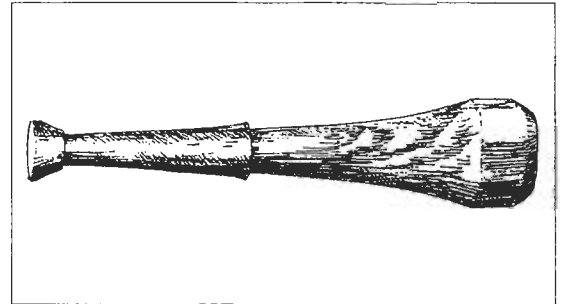


図13 事例23「Club」(Coast Salish族、所蔵者不詳、Stewart 1977:63より転載)

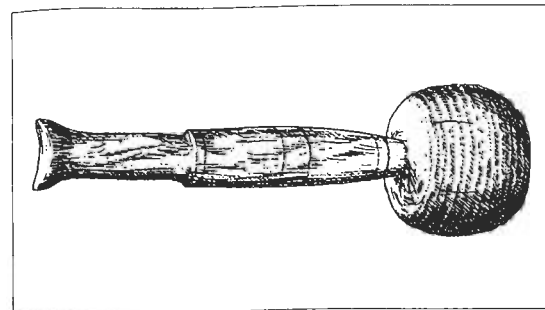


写真12 事例24「Fish Club」(部族名不詳、北海道立北方民族博物館所蔵)

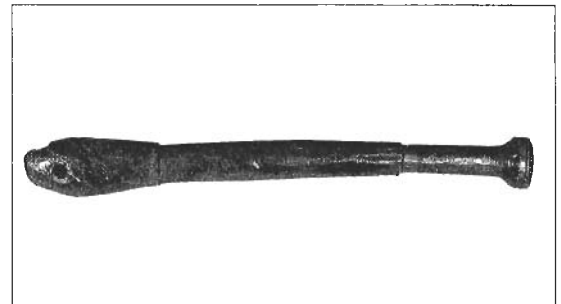


図14 事例25「Salmon Clubs」(Nootka族?、所蔵者不詳、Underhill 1945:26より転載)

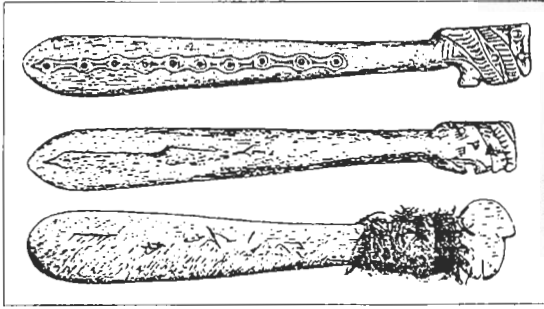


写真14 註8の「Club」(Kwakiutl族、Hawthorn 1979:85より転載)

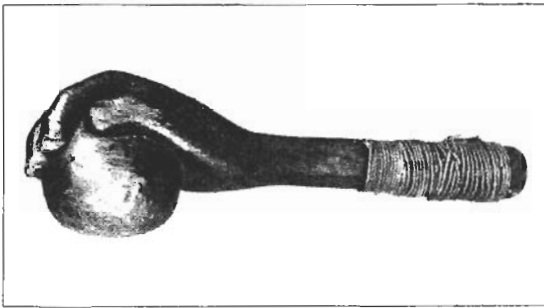


写真13 註6の「Seal killer」(エスキモー、国立民族学博物館所蔵)

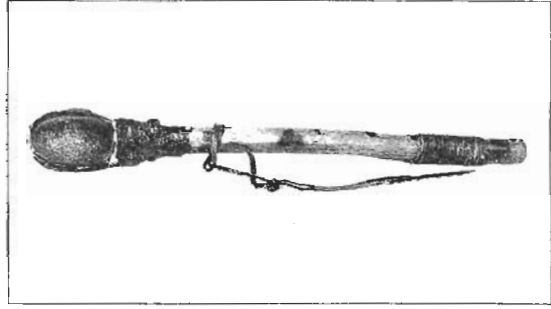


写真15 註9の現在の非北西海岸ネイティブに見られる魚叩棒(キャンベル・リバー)



---

---

"Fishhead-Striking-Club" as a Magical Implements,  
and "Fishhead-striking" as a Magic  
(The 2nd volume:Northwest Coast Native Peoples in North America)

---

Yutaka, Suga

---

In North Pacific Rim, the native peoples, the great bicontinental arc that circumscribes the northern reaches of the Pacific Ocean, occupy one of the richest maritime environments (include river and lake) in the world. Its varied resources include many species of fish. The sea and river exert a strong unifying influence on the cultures of the region.

Because the fish (especially "salmon") of the river and sea were life itself to the native peoples of the North Pacific Rim, customs and taboos arose to regulate the activities connected with fish and fishing. Because the salmon were, for the majority of the cultures of the region, the most important of all the fish, there were more beliefs and customs about salmon than about any other fish. These beliefs regulated the attitude of caring for the fish, and reverence for their role in life.

In Northwest coast, native fisherman always had a thick club of wood or bone by his side, and with this he killed his catch. He did so by knocking it on its head. He decorated on the club elaborately, and handled it carefully. The carved design in it demonstrated that salmon had a ritual importance.

In this paper, the author examines basic form, design, and how to use of fishhead-striking-club, points out that fishhead-striking-club is a magical implements, and striking on salmon's head is a magical activity.